

地方村落の文献の中に、たとえば四清工作隊の会議記録を見つけた人がいる。工作隊は彼らの上級部門への報告文書について、どのように上級の考え方に沿うように書けば、上級の認可を得て通過できるかを主に検討しており、村の実際の状況を反映して報告を作成したわけではなかった。このようにして書かれた工作報告は、末端で作られたものであったとしても、その内容は農村の本当の状況を反映したものではなく、上級の意図に沿うように書かれたものである。したがってその信頼性には問題がある。村落資料の中には農民が書いた申請書、検討書、決意書の類もたくさんある。これらは農民が書いたものだが、多くは新聞の言い方を引き写したもので、たとえば「搾取階級思想」「資産階級法権」「無産階級専政下での継続革命理論」などについて、農民が本当にどれだけ理解していたのかは、やはり検討が必要である。これらの文書は量は膨大だが、内容は基本的に同じで、ほとんどは新聞・雑誌から書き写したものである。

最後に、個人・地方文献を使用する際にはやはり個人のプライバシーの問題に注意しなければならない。これは学術倫理に関わる問題である。農村文献中の多くの検討書、摘発書の中には、個人の婚姻や、男女関係、個人の素行といった問題に関わるものがある。これらの人々あるいはその子孫がまだ生きていたり、まだその村で生活している者がいたりする場合には、それらの資料の引用や公開の際に特に注意が必要である。

第3セッション 「檔案資料から見る“中国”の内と外」

胡適研究の新ツール——「胡適檔案検索系統」と「胡適蔵書検索資料庫」の紹介

潘 光哲（台湾中央研究院研究員兼胡適記念館主任）

20世紀の華人の歴史舞台の上で、胡適は常に枢要な位置を占めており、その存在を無視できる者は誰もいない。胡適が守り続けた理念、胡適が力を尽くした事業には、一体どのような啓発的な意義があるのか。胡適自身の言葉を借りて言えば、当然ながら「その本来の姿を取り戻す」努力が必要である。しかし、胡適の独特の人生の歩みと思想世界は、錯綜して複雑であり、複雑な歴史像を「単純化」「レッテル化」する危険性を可能な限り避けることで、はじめて胡適の人生の歩みとその思想的遺産に対する我々の認識は精緻なものとなるのである。しかし、比較的完全に近く、利用しやすい『胡適全集』は、今に至るもなお刊行されていない。胡適と友人たちの往来書簡や蔵書の整理も、なお未完の事業である。そのため、胡適に関する材料を広く集めることだけが、「胡適研究」を深化させる正道である。



台北市南港区に位置する中央研究院近代史研究所胡適記念館（以下、胡適記念館と略す）は、1962年に創設され、幾度もの変遷を経つつ、これまで内外の胡適記念・研究の最重要の殿堂であり続け、「胡適研究」の推進に全力を尽くしてきた。胡適記念館は所蔵する胡適の晩年（主に1949年以後）の一次檔案資料を基礎に、現代科学技術の助けを借りて、北京の中国社会科学院近代史研究所および北京大学図書館と協力し、兩岸に分散した胡適檔案と胡適蔵書を、突き合わせ、電子化する作業を完成させた。2016年7月までに、すでに『胡適蔵書目録』（2013年）を出版し、また（1949年以後を主とする）「胡適蔵書検索資料庫」と「胡適檔案検索資料庫」（<http://www.mh.sinica.edu.tw/koteki/metadata.aspx>）を完成させ、全世界に向けて公開した。研究者は現地に行く必要なく、ただ簡単な申請手続きをするだけで、コンピュータとインターネットを利用して検索を行い、非常に手軽に研究に関連する一次資料を探し出し、無料で閲覧・プリントアウトすることができ

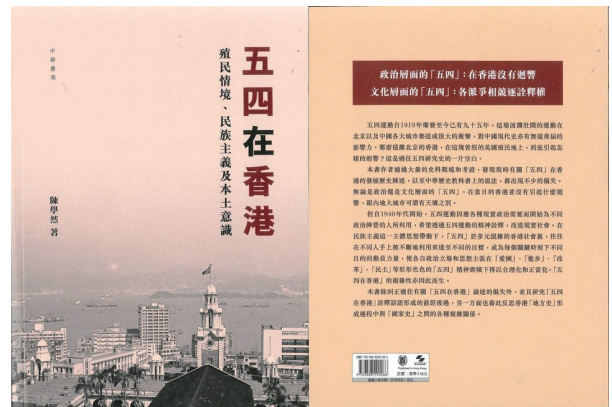
る（プリントできる分量には制限がある）。

「胡適檔案検索資料庫」と「胡適蔵書検索資料庫」は、「胡適研究」を展開する新たなツールであり、無限の助力を提供する。具体的な例として、胡適と魯迅・錢穆・殷海光・蔣介石の間の交流と論争などを取り上げ、この新たなツールを利用していかに「胡適研究」を深化させ、より深い歴史認識に至ることができるかを明らかにした。したがって、「胡適檔案検索系統」と「胡適蔵書検索資料庫」の公開は、「胡適研究」の分野の発展と深化に、必ず「無駄とはならない」作用と意義をもつだろう。

檔案資料の内と外——「五四」・「香港」を中心とする検討

陳 学然（香港城市大学副教授）

本報告は、主に、筆者が過去数年間におこなった「香港」および「五四運動」に関する研究成果をまとめたものである。ここでは、檔案資料あるいは檔案以外の中国語文献の新資料（たとえば日記・回想録・新聞雑誌・書簡など）がどのように利用され、どのような学術的成果が得られたのかを検討した。また、檔案資料をどのようにすれば十分に活用できるのかを自身の研究テーマに即して説明し、それが今後の現代中国研究、とりわけ香港を中心とする現代中国研究にどのような変化をもたらす得るのかを論じた。



報告は二つの部分からなる。第一の部分は「各おの其の是とするところを行う——「東南互保」と「両広独立」における各方面の政治的策謀」を中心とし、イギリスのFO・CO 檔案とそれ以外の書簡資料が、関連する研究領域にどのような補正作用を発揮するかを紹介した。本章を通じて、この二種類の檔案が既存の関連研究の限界をどのように補えたかを確認できる。また香港の初期の歴史的発展をめぐって、これまで知られていなかった重要情報や内部情報、各方面のめまぐるしい政治的角逐を反映した歴史的な糸口を描き出すことができた。たとえば、1900年の革命派、維新派、イギリスのロンドンの内閣、香港のイギリス官僚、満清政府、現地の督撫らの政治的策謀を解明できた。さらに、香港という小さな土地がはじめて各派が「各おの其の是とするところを行う」闘争の中で戦略的な位置を発揮したことも確認できた。FO・CO 檔案は非常に確かな参考価値をもち、香港イギリス政府が内地の政治状況に衝撃を受けた際に、どのような反応を見せ、どのように香港政府に対する内外それぞれ異なる衝撃の処理に着手したか、その異なる手法を伝えてくれる。

第二の部分は拙著『香港における五四——殖民状況・民族主義・本土意識』の内容を中心として、「香港における五四」に関する知識の誕生が、1997年の復帰という政治的要素の下で形成された一連の大国史観を起源とする、「中心」から「周辺」を見るレトリックに基づくものであったことを明らかにしようとした。関連研究の利用を通じて、中国国内の如何なる変動であっても、香港の政局の展開に重大な影響を及ぼしたのだと感じた。あるものはすぐに社会の反応を引き起こし、あるものは香港政府の厳しい管理によって制御されたものの、香港が、内地の政治の余波・衝撃を受けるだけでなく、実際には国内の文化的正統性が中心から外部に向けて不断に拡散していった地続きの場でもあり、さらには国内の左右分裂という政治闘争に連続したイデオロギー闘争の場であったことは容易に見いだせる。

さらに、本報告では「香港における五四」に関する既存の説を相対化することにとどまらず、歴史檔案、回想録、日記、新聞、書簡などを通じて「香港における五四」についての認識をあらたにし、どのようにより多くの視角を提供できるかを説明したい。またそれによって香港社会における国家アイデンティティの変遷史を観察でき、香港の都市機能や思想戦略上の位置をさらに深くかつ全面的に示すことができればと思う。